

人は道具を使う動物であり、道具を使うことにより自然の形を変え、衣食住など人間の望みをより良く満たしてしてきた。さまざまな道具は歴史の中で勝ち取ってきた人間の知恵と工夫を伝えている。



1 別所下ノ前・2 法蓮町・3 西大寺栄町
4 大森町・5 三条宮前町・6 横領町

旧石器 奈良市内各地

後期旧石器時代 (25000 ~ 18000 年前)

人類の歴史の中で、石器は最も古くから存在する。市内では後期旧石器時代の石器も近年発見されるようになった。二上山のサヌカイト製のナイフ形石器の他、島根県隠岐島の黒曜石を使った角錐状石器がある。



弓と石器 1 菅原東遺跡 (弓) 縄文時代晩期 (3000 ~ 2300 年前)
2 水間遺跡 (石鏃ほか) 縄文時代早期~晩期 (10000 ~ 2300 年前)
3 柏木遺跡ほか (石鏃・石包丁ほか) 弥生時代中期 (紀元前2~前1世紀)

弓は一木材でつくり赤漆を塗って飾った丸木弓。弓矢の使用は縄文時代からはじまり、中小型獣の狩猟に不可欠の飛道具であった。弥生時代中期にも打製石器が使われているが、磨製石器の穂摘具 (石包丁) が稲作をものがたる。弥生時代の石鏃は中期からその長さや重さが増し、狩猟具であった弓矢は武器へと転化したとされる。



石杵 柏木遺跡
古墳時代前期（4世紀）
円柱形の杵で、花崗岩製。磨り面は摩滅して、水銀朱が付着している。



竖杵 北新遺跡
弥生時代前期（紀元前3～前2世紀）
穀物の脱穀、精白、餅つきに臼とともに使用する杵は弥生時代に稲作とともに登場する。握り部が広く、両手で使用したことがわかる。



甲冑と鉄鏃 ベンシヨ塚古墳
古墳時代中期（5世紀）
古墳時代中期の鏃はすべて鉄製で、貫通力、殺傷力が強まり、防御する甲冑も鉄製となる。中期古墳にはこうした鉄製の武器、武具の副葬が増える。



釣瓶と柄杓 平城京左京四条一坊（竹籠で覆った甕） 奈良時代（8世紀）
 平城京左京五条二坊（木製釣瓶） 奈良時代（8世紀）
 平城京右京三条三坊（瓢柄杓） 平安時代前期（9世紀後半）

井戸から水を汲む釣瓶は字の如く、釣下げた土器であった。竹籠で覆われた土器は、釣瓶とみられる。奈良時代には鉄製釣金具を備えた木製割り物の釣瓶もある。柄杓は曲物に柄をつけたもの他、ヒョウタンを利用したものがある。



ガラス小玉とその鑄型 平城京右京二条三坊（ガラス小玉）
 平城京左京五条二坊・左京三条一坊（ガラス小玉鑄型）
 奈良時代（8世紀）

奈良時代にはガラス玉は身につけるアクセサリーではなく、さまざまな装飾に用いられた。土製の鑄型の凹みにガラス片を入れ芯棒をたて、下から熱して大量につくられる。

蓮華紋スタンプ形土製品 平城京右京二条三坊
 奈良時代（8世紀）

奈良時代の軒瓦にみられる蓮華紋のスタンプ。鑄造品の鑄型つくりで使用されたものとも考えられるが、確かな用途は不明。



下駄 奈良市内各地
 飛鳥～江戸時代（7～19世紀）

ぬかるみを歩くための履物で、農具の田下駄は弥生時代からあり、一木から削りだしたものが古墳時代、差歯のものは中世に現れる。古くは鼻緒穴が片寄り、左右の別があるが、奈良時代には鼻緒穴は中央にあけられるものが多い。平安時代には足板、足下からの呼称、足駄と呼ばれる。